

(指宿市西方大園原～大当)

位置と環境

大園原遺跡は、指宿市西方大園原一带に広がる弥生時代後期、縄文時代後期を主体とする遺跡地である。遺跡は海拔25m前後の台地上に位置している。指宿市誌にある大園遺跡、中川遺跡の両遺跡も、現在、大園原遺跡として包括されている。

調査の経緯

平成4年、宅地造成に伴い地下げが行なわれた私有地内から、建物を線刻した土器片が発見され、その後、指宿市教育委員会によって分布調査が行なわれ、広範囲に遺跡が存在することが明らかとなった。

遺構と遺物

大園原遺跡では、発掘調査が行なわれていないため、遺構は確認されていない。

遺物は、線刻画土器のほかに、市来式土器や松山式土器などの縄文時代後期の土器片、石斧、磨石、砥石などの石器が同時に表採されている。

線刻画土器は、幅8cm、長さ6cm程度の大きさで、深鉢形土器の底部付近の破片である。建物の線刻画は、3cm×4cm程の大きさで、ヘラ状の道具で描画されている。絵は、草葺屋根を表現した斜め方向の4列の点と、柱を表現した縦方向の線、床を表現した横方向の線で構成されている。

柱の線が床の線を突き抜けて続いていることから、高床の建物を描いた可能性が考えられている。

この線刻画土器の年代については、

- ・同時に表採された土器がすべて縄文時代後期のものであること。
 - ・土器の表面に施された貝殻を使った調整痕が、縄文時代に見られるものであること。
 - ・ヘラ状の道具を使った施文方法が、縄文時代後期の南九州の代表的な土器である市来式土器のものによく似ていること。
 - ・土器の形が市来式土器の底部付近によく似ていること。
 - ・土器の胎土に黒曜石のチップが含まれること。
- などから、縄文時代後期のものと判断されている。



第1図 大園原遺跡の位置

特徴

大園原遺跡の線刻画土器は、現段階では、国内で最古級の建物絵画である。また、西日本では弥生時代になって掘立柱建物が登場すると言われてきたが、近年の発掘調査成果とあわせて考えても、これを大きく遡り、すでにこの時期には、掘立柱建物があったことを示す証左の1つになりつつある。また、弥生時代に多く見られる線刻画は、そのほとんどが多視点画であり、絵画の技法そのものが多視点画から一視点画へ移り変わるともいわれているが、この建物表現は、一視点画で描かれたもので、古代の描画法を考える上でも貴重な資料と評価できよう。

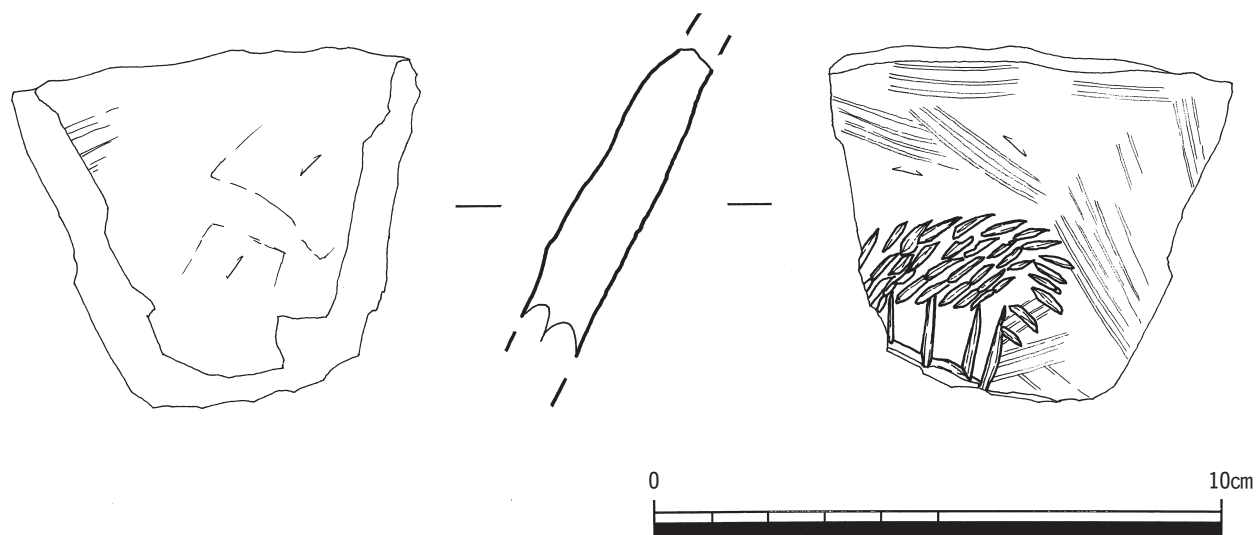
資料の所在

出土遺物は、指宿市考古博物館時遊館 CoCco はしむれに展示・保管されている。

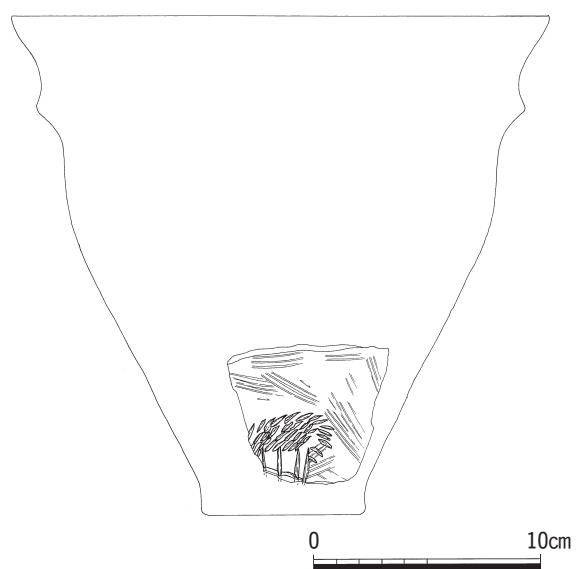
参考文献

考古学フォーラム・イン鹿児島実行委員会1994『考古学フォーラム・イン鹿児島 日本の夜明け 鹿児島島の縄文文化』

(中摩浩太郎)



第2図 線刻画土器実測図



第3図 線刻画土器の想像図（市来式土器のシルエットに線刻画土器の位置を想定してはめ込んだ模式図）

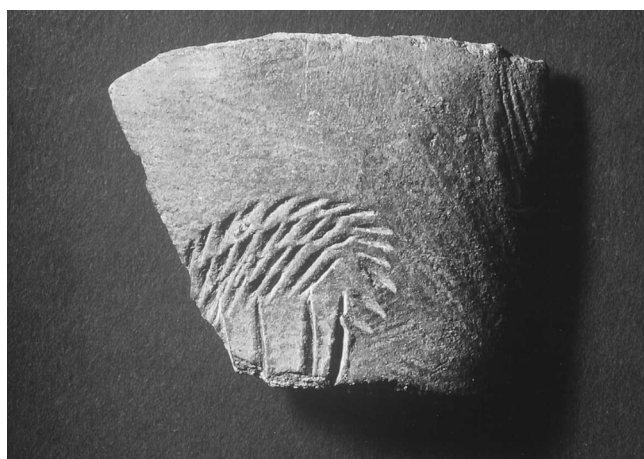


写真1 線刻画土器写真（熊谷武二撮影）